

Title	Social organization of the Manchus. a study of the Manchu Clan organization. By S. M. Shirokogoroff
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.3 (1924. 9) ,p.118(461)- 119(462)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## An early Chinese culture.

By J. G. Anderson. Peking, 1923.

地質彙報第五號よりリプリントせるもの、著者は地質學者で、支那北部地質調査の際石器時代の遺物に注意を拂ひ、奉天錦西縣沙鍋屯洞穴と河南滎池縣仰韶村遺跡とを組織的に發掘してその概要を述べたのが本書である。袁復禮氏の漢譯を添へてゐる。まづ今日の金屬器の形式が石器時代のものに起源せることを指摘し、ラウフェル氏の支那に石器時代なしといふ説を反駁し、ついで奉天沙鍋屯に於ける遺蹟の調査を述べてゐる。洞穴は京奉線の女兒河より分岐せし支線の終點沙鍋屯停車場の南三里にあり、洞穴中には數多の人骨散亂し、古代の生人供御の遺跡なる如く、遺物中よりは南に似たる陶器、紅地黒花の陶器破片等河南出土品に相似たるものを出だし、河南の文化と大體時代同じきことを示してゐる。河南仰韶村の遺址は隴海鐵道滎池縣停車場北十五里にあり、第三紀紅土上の灰土層中に發見され、その中には農業の行はれしことを示す大形の石器、機織の行はれしことを示す紡錘、磨輪の存在を示す精巧土器等あり、著者は遺跡の年代をもつて石器時代より金屬器時代への過渡期にあり、未だ文字を有せざりし漢族の遺物ならんと推定してゐる。又その多色陶器の斷片をもつて西亞の遺品と相似たることを指摘し、之を鑑定したるホブソン氏及びシュミット氏の意見を附記してゐる。ホ氏は、紀元前一千五百年前又は二千年前よりおそからざる時代に於て同製作法が西亞より

東流して支那に入りしならんといひ、シ氏は單に文化の一面の類似をもつてその關係を推定するのは尙早であるとなしてゐる。何れにせよ此問題は今後考古學の發達によつて解決を要すべき東亞文明の始源に關する興味ある研究題目である。(松本信廣)

## Social Organization of the

Manchus. a study of the Manchu

clan organization.

By S. M. Shirokogoroff.

Shanghai, 1924.

著者は一九一二年來ツングースの人種的研究に従事せるものなるが一九一五年アムール河畔に來り、十八箇月間滿洲人及びツングース人の間にあり、ついでツングースの研究に滿洲人の研究の缺くべからざることを認め、一九一七年より一八年に至る間北京及び南滿の滿洲人を觀察し、その結果の一端を北支那アジア協會支部の臨時號として公刊したのが本書である。その内容は極めて豊富にしてまづ滿洲民族の氏族名、その等級的親族制、氏族の組織、その發生、結婚、家族の各員の家内における位置、タプー、女子の權利、經濟狀態、遺産承繼等を極めて精細に叙述してゐる。詳細なる紹介は他日にゆづり、此處には本書を極めて有益にして興味ある勞作として推奨するにさぐめやう。氏族制度の研究はその民族の祖先崇拜の俗と密接な關係あり、著者には別に General Theory of Shamanism among the Tungus. (露文) の著あり、そ

の結論は、アジア協會雜誌に轉載されてゐる。同氏が老嫗の口づからに採集した滿洲人の叙事詩 *Tepalin* もシヤモニズムの研究に多くの資料を提供するものなるが祖國の紛亂のため出版のはこびに至らぬことは残念な次第である。

(松本信廣)

### Demonism verified and analyzed.

By H. W. White. Shanghai, 1922.

狐鳴きの如き鳴物の研究である。著者は、支那内地の宣教師で廿八年間支那人の間に於ける實驗の結果なりと銘をうち、非常な期待をもつて讀ませられたが中程から失望せざるを得なかつた。物鳴きすなはちデモニズムをもつて悪しき人格分裂なりとし、全く心理的原因、即ち正理に反する宗教信仰に起源するものであり主要な動機は暗示であつて、悪魔の働きに淵源する。従つて之を救済するには正しき宗教信仰、即ちキリストの暗示によらねばならぬとすのである。

(松本信廣)

### The Town and Fort of Malacca.

Singapore, 1924.

マラツカの歴史と遺跡を略述したる小冊子である。シンガポールが創建百年に滿たぬ都市なるに比べて當港はカモエンヌの詩にも歌はれて由來極めて古い。ホルトガル人の要塞城門、葡人、蘭人の教會、三四百年前の支那移住民の墳墓などがなほ存在して古へを物語つてゐる。しかも吾人にまつて興味あるはかのフランシ

ス・ザビエルが日本布教の志を起したるはマラツカに於て日人十シロウに會したるがためである。サンチアン島にて死去したる彼の遺骸はマラツカに送られて、一時サンパウロの寺院に葬られ、のちゴアに移されたのである。今も之を記念する黃銅板が教會内陣の南壁にのこつてゐる。

本書は之等遺跡の寫眞、當時の地圖などを挿入し、遊覽客のガイドブックにふさはしく編輯されてゐる。本書の賣上による利潤は當地に於ける舊蹟保存費にあてられるといふ。

(松本信廣)

### To Alps of Chinese Tibet.

By J. W. and C. J. Gregory.

London, 1922.

著者は地質學者でヒマラヤ・アルプス山脈の崛起が如何なる影響をビルマ・マンイの山脈にもたらしたるか、ヒマラヤはその東端に於て如何なる走向をさるか、その他種々の疑問を解決せんとして雲南西藏國境地方の探險に志し。英國政府のチベット自治領内にいらざるかぎり許可すといふ條件の下に一九二二年ビルマより出發しサルウエン・メーコン河をわたり麗江、維西を經、阿墩子に至り、白馬山をよぎり揚子江上流を下つてまた麗江を經、ビルマに歸りし紀行文が本書である。最後に人種的觀察の一端、及び旅行の結果を約述してゐる。即ちマンイビルマの山脈は、ヒマラヤ隆起の多大の影響を受け、かつヒマラヤ山脈は南山々脈へこ走つてゐる。楊子江が石鼓に至り、急激に屈曲せる理由は斷層の